

『因明正理門論』過類段偈頌の 原文推定とその問題点

小 野 基

筆者らの研究グループ（室屋安孝、渡辺俊和、小野基）は、シュタインケルナー・桂両教授の監修の下、オーストリア学士院と中国蔵学研究中心（CTRC）の協力で進められているジネンドラブッディ（Jinendrabuddhi, 8th c.）の *Pramāṇasamuccayaṭīkā*（=PST）梵文写本の校訂プロジェクトの一翼を担い、2012年以來、同書第6章の校訂研究に従事し、筆者はその成果の一部として昨年北京で開催された国際学会においてディグナーガ（Dignāga, ca. 480–540）の *Pramāṇasamuccaya*（=PS）第6章を構成する全25偈の還梵を公表した（Ono [forthcoming]）。ところで、従来から指摘されているように、PS 第6章の偈頌の中には同じ主題を扱う『因明正理門論』（*Nyāyamukha*=NMu）後半の過類段の偈頌と類似したものが数多く含まれている（Tucci 1930: 53–72; 北川1965: 282–351; 桂1984, 桂1987）。従って、上記のPS 第6章の偈頌の還梵は、未だ原文が知られずチベット訳もないNMuの偈頌の理解に新たな光を投げかける可能性がある。筆者は上記発表でそのような問題についても部分的に論及したが、本稿ではNMu 過類段の偈頌の包括的な還梵を試みると共に、その作業から明らかになる漢訳『因明正理門論』の伝承に関わる若干の問題点を指摘したい。

1. 『因明正理門論』過類段の偈頌とその内容

ヴァスバンドゥ（Vasubandhu, 4–5th c.）の *Vādaśāstra*（=VVi; 論軌）以降、仏教の論理学書では、論議（*vāda*）における「誤難」（*jāti*; 過類）、すなわち立論者が立てる正しい推論式に対する対論者の誤った論難の類型として、14種を数え上げることが定説となった（Frauwallner 1957: 121–128; Anhang I; Ono [forthcoming]）。NMu 過類段の諸偈でも、ディグナーガはそれら14種の誤難をVViに説かれた名称と意味内容をほぼ踏襲しながら、簡潔に定義している。但し、VViは『如実論』と同様に誤難を三通りに分類しただけで、その分類の根拠は明示せず、14種の誤難が

誤った論難である理由を論理的に説明し得てはなかった。これを批判して誤難を論理的観点から初めて説明したのが NMu である。

ディグナーガは、NMu 過類段の冒頭で、個別の誤難の説明に先立ち、論難 (*dūṣaṇa*) とは立論者の推論式における推論支の欠落や各推論支の誤りの指摘であるとし (NMu 3c19–20)、誤難をそうした正しい論難とは似て非なるもの (*dūṣaṇābhāsa*) と定義する (第19偈 ab と長行)。これにより、全ての誤難は何らかの論理的誤謬を誤って指摘する論難と位置づけられ、それゆえ論理的誤謬の観点から分類され説明され得るものとなった (Frauwallner 1957: 133,2–7)。

以下でディグナーガは、まず同法相似 (*sādharmyasama*)・異法相似 (*vaidharmyasama*)・分別相似 (*vikalpasama*)・無異相似 (*aviśeṣasama*)・可得相似 (*upalabdhisama*)・猶豫相似 (*saṃśayasama*)・義准相似 (*arthāpattisama*) の七種の誤難を定義し (第20–22偈)、それらは概して立論者の推論式における論証因の不確定を誤って論難している (多疑故似彼) と説明する (第23偈 ab)。続いて至非至相似 (*prāptyapṛāptisama*) と無因相似 (*ahetusama*) の二種を定義し、両者は立論者の推論式における論証因の欠落を誤って論難している (似因闕) とする (第24偈)。さらに無説相似 (*anuktasama*)・無生相似 (*anutpattisama*)・所作相似 (*kāryasama*) の三種を定義し、それらは概して立論者の推論式の論証因の不成立を誤って論難している (多如似宗説; この漢訳には後述の問題が伏在する) とする (第25–26偈)。最後に生過相似 (*prasaṅgasama*) と常住相似 (*nityasama*) の二種を定義し、前者は立論者の推論式に疑似喩例の誤りがある (如喩説) と、また後者は疑似主張命題の誤りがあると誤って論難している (如宗過説) とする (第27–28偈)。

このように、NMu でディグナーガは、『如実論』と VVi において三通りに分類されていた14種の誤難を、同種類の論理的誤謬を誤って指摘しているという共通性を根拠に、五通りに分類し直した (ディグナーガは誤難の分類に関わらなかったとのカン博士の見解は修正を要する。cf. Kang 2012: 617)。但し、NMu の誤難説は、誤って指摘されている論理的誤謬を分類の基準とした点には顕著な理論的発展があるものの、あくまで誤難を「分類」するという従来路線を踏襲しつつ、それを改良したものとも言える。そこでは誤難の論述順序も、VVi の論述順序を原則的に保持しながら、新しい分類基準に照らしてその一部を改変したものに過ぎなかった。

しかし、長行部分 (NMu 4c8–5a6; NMu 5b19–c3; NMu 5a24–25) の叙述が示すように、各々の誤難のグループが誤って論難しているとされる論理的誤謬は、生過相似と

常住相似だけから成る最後の二グループを除いては、一種類に限定されるわけではない。結局、論理的誤謬の観点を導入したとしても、14種の誤難を分類することには無理があるのだ。こうして、ディグナーガは、最終的には自身がNMuで導入した新しい誤難の論述方法を今一度改め、VViから変更した論述順序も再度修正するに至る。すなわち、彼はPS第6章ではもはや『如実論』以来の伝統的な誤難の論述順序には拘泥せず、14の誤難を、推論支（論証因、喩例）の欠落、主張命題の誤り、理由の誤り（不成立因、不確定因、相違因）そして喩例の誤り、という論理的誤謬の体系的順序に相応した論述順序に並び替えた上で、分類を設けずに、各々を論理的誤謬の観点から個別的に説明するという方法を採用するに至るのである。

2. 各偈頌の還梵の試み

NMuとPS第6章の誤難の叙述の間に存する以上の相異点を念頭に置いた上で、以下ではNMu過類段の偈頌についての還梵案を提示し、還梵のプロセスを略説する。還梵に当たっての出発点は、上述のようにPS第6章の偈頌の還梵との対応である。NMu過類段の諸偈は、上述の分類に関わりNMu固有の問題を記述する第19偈abと第23偈ab以外は、ディグナーガ自身によってPS第6章において何らかの形で再利用されたと見られ、両者は多くの部分でよく一致する。困難なのは、PS偈頌との対応が見られない部分の再構成である。以下の還梵の中で〔 〕で示した部分は漢訳や他の資料に基づく推定部分である。さらに、PS偈頌の還梵それ自体が、PSTに引用された *prāṭika*（太字）や他の資料に基づいて語形が確定し得る部分（正字体）以外に、主にチベット訳に基づく推定部分（斜字体）を含むことを忘れてはならない。また、PS偈頌の還梵その他との比較を通じて、漢訳『正理門論』のテキストの伝承に疑義が生じる場合もあり得る。ここでは総合的に判断して、以下の還梵を提案する。

[*dūṣaṇaṃ nyūnatādyuktiḥ tadābhāsas tu jātayah*] (19ab)

nidarśitavipakṣābhyāṃ sādharmaṇyānyasādhanam |
sādharmyasamam *anyat tu vaidharmyeṇa* [*viśeṣakṛt*] || (20)

vikalpasamam | **ekatvaprasaṅgād aviśeṣakṛt** |
upalabdhisamam *sādhya darśane 'nyena hetunā* || (21)

saṃśayākhyārthabhedena hetoḥ saṃśayacodanā |
vīpakṣe 'rthād anīṣtoktir [*tathā*]rthapatti[*saṃjñikā*] || (22)

[*sādharmyādiṣu hi prāyas saṃśayo 'tas tadābhatā*] (23ab)

prāptyaprāptāv anīṣtoktir hetoḥ kālatraye 'pi vā
te prāptyaprāptyahetvākhye hetunūnatvarūpīke || (24)

prāg ukter hetvabhāvena sādhyābhāvāḥ prasañjitaḥ
anuktasamam [*utpatter anutpattisamaṃ tathā*] || (25)

kāryatvānyatvaleśena yat sādhyāsiddhidarśanam
tat kāryasamam [*etāni pakṣābhāvanibhāni tu*] || (26)

prasaṅgasamam iṣṭe 'pi dvayor hetur hi mārgyate
dr̥ṣṭāntābhāsavat tv etad [*dr̥ṣṭānte yadi codanā*] || (27)

anīyatānvayān [*nīyaṃ*] *nīya[samā tathāpi ca]* |
nīyatvāsaktir atrāpi pakṣadoṣatvarūpikā || (28)

以下に還梵プロセスの要点のみを論じる。詳細は後日出版予定の英文別稿を参照されたい。

まず、誤難を定義して議論を導入する役割を持つ第19偈 ab (能破闕等言似破謂諸類) は、同内容の PS 6.1-2 には明白な対応が見出だされない一方、ダルマキールティの PVin III v. 85ab がほぼ同文である。その際 PVin では *tadābhāsās* という語が用いられている点が注意される。両者を比較して気づくのは、NMu の梵文が *dūṣaṇa(ā)* の語を半偈中に二度含むとするとやや冗長で、PVin の表現が自然な点である。「似破」の語に対して *dūṣanābhās* を宛てるのも可能だが、他方で漢訳の伝承が、後述する第23偈 ab にも見られるように本来の「似彼」(*tadābhāsās*) を「似破」と誤伝した可能性も考えられる。還梵はこの点を考慮した。

次に、同法・異法・分別・無異・可得の五つの誤難を簡潔に定義する第20-21偈 (示現異品故 由同法異立 同法相似餘 由異法分別 差別名分別 應一成無異 顯所立餘因名可得相似) は、ほぼ PS 6.8, 13ab, 16ab と一致すると見てよい。対応する PS 偈頌の還梵の中には推定個所も含まれるが、それらも NMu 漢訳とよく対応する。他方、PS 6.8 と 13ab に対応を欠く「分別差別名分別」の部分には内容的には PS 6.12ab' に対応し、「名分別」の原文は *vikalpasamam* で問題なからう。残る「分別差別」に対しては第20偈末尾の四音節に収まる簡潔な表現が必要になるが、ここでは分別相似と無異相似が一对の対照的な誤難である点に鑑み、無異相似を形容する *aviśeṣakṛt* (成無異) と対照的な *viśeṣakṛt* という語を想定した。

第22偈 (難義別疑因 故説名猶豫 説異品義故 非愛名義准) は猶予相似を定義する前半部と義准相似を定義する後半部とからなるが、両者は各々、PS 6.18 と 6.19 の定義部分とよく対応する。ab 句の原文は、語順は一致しないが PS 6.18ab と同一

とみてよかろう。長行の文言 (NMu 4b20–21) は「猶豫」に対応する語が女性形で偈中に存することを示唆するが、これは *saṃśayākhyā* を指すと理解できる。c 句に関しても漢訳の「說異品義故非愛」は PS 6.19a によく対応する。他方、d 句については、長行に「應知、此中略去後句、是故但名猶豫義准」(NMu 4c1–2) という文言が存在するため、PS 6.19b に現れる *arthāpattisama* という表現全体を還梵に含めることはできない。偈の中で二つの誤難は *sama* を伴わない表現で言及されている必要がある。*saṃśayākhyā* (名猶豫) はこの要請に合致するが、名義准という語に対応する梵語にも同様な表現が必要となる。

第23偈 ab (由此同法等 多疑故似彼 [：似破]) については既に上記拙稿で論じた。結論のみ述べると、漢訳 b 句末尾部分について二種の異なった読みが伝承されているが、「似破」ではなく、似不定を意味し得る「似彼」という伝承が採用されるべきであり、その原語は PS 第6章の偈頌の中にも散見される *tadābhatā* の可能性が高い。この偈は NMu に固有の内容で他文献に対応がないため構文の確定は困難だが、半偈16音節の中に上述の *tadābhatā* (似彼) の他に、*idam* (此)、*sādharmyādi* (同法等)、*prāyas* (多)、*saṃśaya* (疑) 等の語彙が含まれていると推定される。ここでは暫定的に上記の還梵を提案する。

至非至相似と無因相似を定義する第24偈 (若因至不至 三時非愛言 至非至無因是名似因闕) の原文は、恐らく PS 6.3 と全同であろう。PS の還梵では c 句冒頭の指示代名詞 *te* がチベット訳に基づく推定形だが、NMu にも「是」の語が存在している。「是」が指示代名詞 *te* の訳語である可能性は十分考えられよう。

無説相似と無生相似を定義する第25偈 (説前無因故 應無有所立 名無説相似 生無生亦然) に関しても既に上記拙稿で論じたので、ここでは結論のみを記す。まず、abc 句については PS 6.5abc' と同文とみて差し支えない。問題は d 句だが、「生無生」については「生」の原語は恐らく *prāg utpatter hetvabhāvena sādhyābhāvah prasañjitaḥ* の省略表現としての奪格形 *utpatteḥ* であろう。残る「無生」は *anutpattisamam* と想定され、また末尾の二音節は、「亦然」と訳されることが多く韻律的にも妥当な *tathā* で問題なからう。

第26偈 (所作異少分 顯所立不成 名所作相似 多如似宗説) も、所作相似を定義する abc 句については PS 6.7abc' とよく対応し同文とみて差し支えない。他方、PS に対応のない漢訳 d 句の対応部分の想定が難しい。この部分は内容的には、「直前に定義された三つの誤難は概して同種の論理的誤謬を誤って指摘しているがゆえに同種の誤難である」との趣旨のはずである。「如似宗説」という漢訳による

限り、その論理的誤謬は疑似主張命題であることになるが、誤って指摘されている論理的誤謬として長行で三つの誤難に共通して言及されるのは、不成立 (*asiddha*) の誤謬である (NMu 5b17-c3)。偈の直後の長行でも、「如似宗説」を「如不成因過」と説明する (NMu 5b17-18)。そもそも、もしこれら三つの誤難が「如似宗説」であるならば、同じく「如宗過説」とされる常住相似が、何故これらとは別個に分類されるのか。この点を考慮し上記還梵を想定してみた。本来 *paṅśābhāva*^oであったものが、*paṅśābhāsa*^oと誤伝あるいは誤読された結果、漢訳者が「如似宗説」と訳した、という仮説である。*paṅśābhāva* は不成立の一種である所依不成 (*āśrayāsiddha*) を意味し得るから、「謂如不成因過」と説明されることに違和感はない。更に、この仮説では長行の「如似所立説」の部分も本来の *sādhyābhāva*^oが *sādhyābhāsa*^oと誤伝ないし誤読された結果であることになるが、*sādhyābhāva* は無説相似と無生相似が帰結させる論理的誤謬として第25偈の中で用いられている語であるから、長行が *paṅśābhāva*^oを *sādhyābhāva*^oと換言して説明しているのだとすれば、その記述の意味はよく理解できる。なお、長行には「多」の語を註釈する文言がある (NMu 5b18-19) ので本来は偈中に *prāyas* 等の語の存在を想定する必要があるが、韻律に適う原文の推定は難しく、目下解決策を見出せていない。ここでは *prāyas* を含まない還梵を暫定的に提示しておく。

生過相似を定義する第27偈 (俱許而求因 名生過相似 此於喩設難 名如似喩説) は、チベット訳からの想定箇所を含め PS 6.20abc によく対応している。漢訳「於喩設難」に対応すべき d 句は、「設」の語を梵語 *yadi* の漢訳と考えれば (そのような例は他にも存在している)、上述の還梵を想定できよう。

最後に、常住相似を定義する第28偈 (無常性恒隨 名常住相似 此成常性過 名如宗過説) は、チベット訳からの想定を含むものの、PS 6.4bcd によく対応する。問題は、漢訳には「相似」の語が存在する一方で、PS 6.4b の誤難の名称に *sama* の語が欠けている事実をどう見るかである。それというのも、上述全ての偈において誤難の梵語名称は、漢訳における誤難の名称が「相似」の語を含む場合には常に *sama* の語を伴っているように見えるからである。それ故、玄奘訳がこのような方針の下に行われていると仮定すると、*sama* の語を欠く PS 6.4b をそのまま還梵に用いることはできず、*nityasama* という語の存在を想定する必要がある。

以上の検討に基づき、NMu 過類段偈頌に関し上記還梵を提案する。周知のように NMu については不完全なものながら梵文写本の現存が報告されている。将来それが披見可能となり校訂作業が進められる際に、本稿の考察がその一助とも

なれば幸いである。

〈一次文献〉

『如実論』：『如実論反質難品』，大正蔵第32卷 T no. 1633. **NMu**：『因明正理門論』，大正蔵第32卷 T no. 1628. **PVin III**: *Dharmakīrti's Pramāṇaviniśaya*: Chapter 3. Ed. Pascale Hugon and Tōru Tomabechi. Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2011. **PS 6**: see Ono [forthcoming]. **PSV ad PS 6**: *Pramāṇasamuccayaṅgīti* VI reconstructed by Ono, Muroya, Watanabe. Unpublished.

〈二次文献〉

Frauwallner, Erich. 1957. "Vasubandhu's Vādaśāstra." *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 1: 104–146.

Kang, Sung Yob. 2012. "The Typology of *Jāti*-s Indicated by *Diñnāga* and Development of *Diñnāga*'s Thought." *Journal of Indian Philosophy* 40: 615–633.

桂紹隆 1984 「因明正理門論研究 [六]」『広島大学文学部紀要』44: 43–75.

——— 1987 「因明正理門論研究 [七]」『広島大学文学部紀要』46: 46–67.

北川秀則 1965 『インド古典論理学の研究』鈴木学術財団.

Ono, Motoi. forthcoming. "On the Importance of a Sanskrit Manuscript of Chapter 6 of the *Pramāṇasamuccayaṅgīkā* in Research on the Buddhist *Vāda* Tradition." In *Proceedings of the 6th Beijing International Seminar on Tibetan Studies*.

Tucci, Giuseppe. 1930. *The Nyāyamukha of Dignāga. The Oldest Buddhist Text on Logic. After Chinese and Tibetan Materials*. Heidelberg.

(平成29年度科学研究費基盤研究 (B) 15H03155 による研究成果の一部)

〈キーワード〉 *Dignāga*, 因明正理門論, *Pramāṇasamuccaya*, *jāti*, 偈頌, 還梵
(筑波大学教授, Dr. phil.)